

やんぬる哉

太宰治

青空文庫

こちら（津軽）へ来てから、昔の、小学校時代の友人が、ちよいちよい訪ねて来てくれる。私は小学校時代には、同級生たちの間でいささか勢威を逞たくましゆうしていたところがあつたようで、「何せ昔の親分だから」なんて、笑いながら言う町会議員などもある。同級生たちはもうみんな分別くさい顔の親父になって、町会議員やらお百姓さんやら校長先生やらになりすまし、どうやら一財産こしらえた者みたいに落ちつき払っている。しかし、だんだん話合つてみると、私の同級生は、たいてい大酒飲みで、おまけに女好きという事がわかり、互あきに呆れ、大笑いであつた。

小学校時代の友人とは、共に酒を飲んでも楽しいが、中学校時代の友人とは逢あつて話しても妙に窮屈だ。相手が、いやに気取っている。私を警戒しているようにさえ見える。そんなら何も私なんかと逢つてくれなくてもよさそうなものだが、この町の知識人としての一応の仁義と心得ているのか、わざわざ私に会見を申込む。

ついせんだつても、この町の病院に勤めている一医師から電話が掛つて来て、今晚粗飯を呈したいから遊びに来いとこの事であつた。この医師は、私と中学校の同級生であつたと、かねがね私の親戚の者たちに言っているそうであるが、私にはその人と中学時代に遊んだ

記憶はあまり無い。名前を聞いて、ぼんやりその人の顔を思い出す程度である。或いは、彼は、私より一級上であったのが、三学年か四学年の時にいちど落第をして、それで私と同級生になったのではなかったかしら、とも私は思っている。どうも、そうだったような気もする。とにかく、その人と私とは、馴染が薄かった。

私はその人から晩ごはんのごちそうになるのはどうにも苦痛だったので、お昼ちよつと過ぎ、町はずれの彼の私宅にあやまりに行った。その日は日曜であったのだろう、彼は、ドテラ姿で家にいた。

「晩餐会ばんさんかいは中止にして下さい。どうも、考えてみると、この物資不足の時に、僕なんかにごちそうするなんて、むだですよ。つまらないじゃありませんか。」

「残念です。あいにく只今、細君も外出して、なに、すぐに帰る筈はずですがね、困りました。お電話を差し上げて、かえって失礼したようなものですね。」

私は往来に面した二階のヴェランダに通された。その日は、お天気がよかった。この地方に於いて、それがもう最後の秋晴れであった。あとはもう、陰鬱な曇天どんてんつづきで木枯こがらしの風ばかり吹きすさぶ。

「実はね、」と医師はへんな微笑を浮べ、「配給のリンゴ酒が二本ありましてね、僕は飲

まないのですが、君に一つ召上っていただけで、ゆっくり東京の空襲の話でも聞きたいと考えていたのです。」

おおかた、そんなところだろうと思っていた。だから、こうして断りに来たのだ。リンゴ酒二本でそんなに「ゆっくり」つまらぬ社交のお世辞を話したり聞いたりして、窮屈きわまる思いをさせられてはかなわない。

「せっかくのリンゴ酒を、もつたいない。」と私は言った。

「いいえ、そんな事はありません。どうせ僕は飲まないんですから。どうです、いま召し上りませんか。一本、栓せんを抜きましょう。」

まるで、シャンパンでも抜くような騒ぎで、私の制止も聞かず階下に降りて行き、すぐその一本、栓を抜いたやつをお盆ぼんに載せて持って来た。

「細君がいないので、せっかくおいで下さっても、何のおもてなしも出来ず、ほんの有り合せのものです。でも、これはちよつと珍らしいものでしてね、おわかりですか、ナマズの蒲かば焼やきです。細君の創意工夫の独特の味が付いています。ナマズだって、こうなると馬鹿に出来ませんよ。まあ、一口めし上つてごらん下さい。鰻うなぎと少しも変りませんから。」

お盆には、その蒲焼と、それから小さいお猪口ちよこが載っていた。私はリンゴ酒はたいてい

大きいコップで飲む事にしていて、こんな小さいお猪口で飲むのは、はじめての経験であったが、ビール瓶のリング酒をいちいち小さいお猪口にお酌しやくされて飲むのは、甚はなはだ具合の悪い感じのものである。のみならず、いささかも酔わないものである。私はすすめられて、この奥さんの創意工夫に依よるものだというナマズの蒲焼にも箸はしをつけた。

「いかがです。細君の発明ですよ。物資不足を補って余りあり、と僕はいつもほめてやっているのだが、じつさい、鰻とちつとも変りが無いのですからね。」

私はそれを嚙えんか下して首肯しゅこんし、この医師は以前どんな鰻を食べたのだろうといぶかった。「台所の科学ですよ。料理も一種の科学ですからね。こんな物資不足の折には、細君の発明力は、国家の運命を左右すると、いや冗談でなく、僕は信じているのです。そうそう、君の小説にもそんなのがあったね。僕はいまの人の小説はあまり読まない事になっているので、君の小説もたった一つしか拝見した事はないのだが、何でも、新型の飛行機を発明してそれに載って田圃に落ちたとかいう発明の苦心談、あれは面白かった。」

私はやはり黙って首肯した。しかし、そんな小説を書いた覚えは、私にはさらに無かつた。

「とにかく、日本もこれから、新しい発明をしなければ駄目ですよ。男も女も、力を合せ

て、新しい発明を心掛けるべき時だと思つています。じつさい、うちの細君などは、まあ僕の口から言うのはおかしいですけど、その点は、感心なものです。何かと新しい創意工夫をするのです。おかげで僕なんかは、こんな時代でも衣食住に於いて何の不自由も感じないで暮して来ましたからね。物が足りない物が足りないと言って、闇の買いあさりにきようほん狂奔している人たちは、要するに、工夫が足りないのです。研究心が無いのです。このお隣りの畳屋にも東京から疎開そかいして来ている家族がおりますけれども、その細君がないだうちへやつて来て、うちの細君と論戦しているのを私は陰で聞いて、いや、面白かつたですよ。疎開人にはまた疎開人としての言いぶんがあるらしいんですね。その細君の言うには、田舎いなかのお百姓さんが純朴だとか何とか、とんでもない話だ、お百姓さんほど恐ろしいものは無い。純朴な田舎の人たちに都会の成金どもがやたらに札幌らを切つて見せて墮落させたなんて言うけれども、それは、あべこべでしょう。都会から疎開して来た人はたいてい焼け出されの組で、それはもう焼かれてみなければわからないもので、ずいぶんの損害を受けているのです。それがまあ多少のゆかりをたよつて田舎へ逃げて来て、何も悪い事をして逃げて来たわけでもないのに肩身を狭くして、何事も忍び、少しずつでも再出発の準備をしようと思つているのに、田舎の人たちは薄情なものです。私たちだって、

ただでものを食べさせていたかどうかとは思っていません、畑のお仕事でも何でも、うんと手伝わせてもらおうと思つてゐるのに、そのお手伝いも迷惑、ただもう、ごくつぶし扱いにして相談にも何も乗つてくれないし、仕事がないからよけいも無い貯金をおろして、お手伝いも出来ぬひけめから、少し奮発してお札に差出すと、それがまた気にいらならしく、都会の成金どもが闇値段を吊り上げて田舎の平和を乱すなんておっしゃる。それでいてお金を絶対に取らないのかというと、どうしてどうして、どんなに差上げても多すぎるとは言わない。お金をずいぶん欲しがつてゐるくせに、わざとぞんざいに扱つてみせて、こんなものは紙屑かみくず同然だとおっしゃる、罰ばちが当たりますよ、どんなお札にだつて菊の御紋が付いてゐるんですよ、でもまあ、そうしてお金だけで事をすましてくれるお百姓さんはまだいいほうで、たいていは、お金とそれから品物を望みます。焼け出されのほとんど着のみのままの私たちに向つて、お前さまのそのモンペでも、などと平気で言うお百姓さんもあるのですからね、ぞつとしますよ、そんなにまでして私たちからいろいろなものを取り上げながら、あいつらも今はお金のあるにまかせて、いい気になつて札びらを切つて寝食いをしてゐるけれども、もうすぐお金も無くなるだろうし、そうなつた時には一体どうする気だろう、あさはかなものだ、なんて私たちをいい笑い物にしてゐるのです。私た

ちは以前あの人たちに何か悪い事でもして来たのでしようか、どうして私たちにこんなに意地悪をするのです。田舎の人が純朴だの何だの、冗談じゃありません、とこうまあいったような事をお隣りに疎開して来ている細君が、うちの細君に向ってまくし立てたのです。これに対して、うちの細君はこういう答弁を与えました。それは結局、あなた自身に創意と工夫が無いからだ、いまさら誰をうらむわけにはいかない、東京が空襲で焼かれるだろうという事は、ずいぶん前からわかっていたのだから、焼かれる前に何かしらうまい工夫があつて然るべきであつた。たとえば今から五年前に都会の生活に見切りをつけて、田舎に根をおろした生活をはじめていたら、あまりお困りの事は無かつた筈だ。愚^ぐ図^ず々々と都会生活の安逸にひたつていたのが失敗の基である、その点やはりあなたも罪はある、それにまた、罹^り災^{さい}した人たちはよく、焼け出されの丸はだかだの、着のみ着のままだのと言ふけれども、あれはまことに聞きぐるしい。同情の押売りのようにさえ聞える。政府はただちに罹災者に対してお見舞いを差上げている筈だし、公債や保険やらをも簡単にお金にかえてあげているようだ。それに、全く文字どおりの着のみ着のままという罹災者は一人も無く、まずたいはいは荷物の四個や五個はどこかに疎開させていて、当分の衣料その他に不自由は無いものの如^{ごと}くに見受けられる。それだけのお金や品物が残っていたら、な

に、あとはその人の創意工夫で、なんとかやって行けるものだ、田舎のお百姓さんたちに
たよらず、立派に自力で更生の道を切りひらいて行くべきだと思う。とこうまあ謂わば正
論を以て一矢報いてやったのですね、そうすると、そのお隣りの細君が泣き出しましてね、
私たちは何もいままで東京で遊んでいたわけじゃない、ひどい苦勞をして来たんだ、とか
何とか、まあ愚痴ですね、涙まじりにくどくど言つて、うちの細君の創意工夫のアメリカ
ソバをごちそうになつて帰りましたが、どうも、あの疎開者というものは自分で自分をみ
じめにしていますね、おや、お帰りですか、まだよろしいじゃありませんか、リンゴ酒を
さあどうぞ、まだだいぶ残っています、これ一本だけでもどうか召し上つてしまつて下さ
い。僕はどうせ飲まないのですから、そうですね、どうしてもお帰りになりますか、ざん
ねんですね。うちの細君も、もう帰つて来る頃ですから、ゆつくり、東京の空襲の話でも
。

私にはその時突然、東京の荻窪あたりのヤキトリ屋台が、胸の焼き焦げるほど懐しく
思い出され、なんにも要らない、あんな屋台で一串二銭のヤキトリと一杯十銭のウイスケ
というものを前にして思うさま、世の俗物どもを大声で罵倒したいと渴望した。しかし、
それは出来ない。私は微笑して立ち上り、お礼とそれからお世辞を言った。

「いい奥さんを持って仕合せです。」往来を、大きなカボチャを三つ荒縄でくくって背負い、汗だくで歩いているおかみさんがある。私はそれを指さして、「たいていは、あんなひどいものなんですからね。創意も工夫もありやしない。」医師は、妙な顔をして、ええ、と言った。はっと思うまもなく、その女は、医師の家の勝手口にはいった。やんぬる^{かな}哉。それが、すなわち、細君御帰宅。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：ゆうい

2000年3月21日公開

2005年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

やんぬる哉

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>